郷土への扉
The gateway to local history

福山のイチョウと宮浦宮

秋になり、各地で紅葉色づく季節となりました。霧島市で紅葉が有名な場所の一つに宮浦宮があります。ここのイチョウ、実は県指定文化財（天然記念物）でもあります。

今回は、宮浦宮とイチョウについて紹介します。

全国的にも由緒ある宮浦宮

宮浦宮は福山町福山にある神社で、初代天皇の神武天皇を祭っています。平安時代の記録である『延喜式』に、大隅国の五社の一つとして書かれており、「式内社」（『延喜式』の中に登場する神社）と呼ばれる全国的にも由緒ある神社です。

晩年を国分の舞鶴城で過ごした戦国大名・島津義久が、福山の※1牧野の※2馬追いを視察した際、宮浦宮に参拝して馬の繁殖を祈願し、馬を一頭奉納しました。その後、毎年6月に牧野の※3青馬一頭を寄進することが通例となり、享保10（1725）年からは馬の代わりに料物（お供え物）を寄進することになったと江戸時代の記録にあります。

宝暦2（1752）年には神社の位で最高位とされる「正一位」の※4宣下があり、その古文書も残っています。江戸時代後期の薩摩藩主・島津斉宣が文化5（1808）年に宮浦宮に納めた和歌の短冊も残っています。このように宮浦宮は、古代から福山地域の総鎮守（中心的神社）としてあり続けました。

謎多き名物イチョウ

宮浦宮の境内には、幹周りが約7・6メートルという県内最大級のイチョウの木が2本並び立っています。神武天皇が※5東征前に植えたという言い伝えが残り、巨木が2本並ぶという点も貴重であるため、県の文化財（天然記念物）に指定されています。

「夫婦イチョウ」と呼ばれることもありますが、実は両方とも雌木です。

向かって右の木には寛政3（1791）年の大火による傷痕があり、左の木には明治10（1877）年の西南戦争で官軍から受けた砲弾の痕があります。イチョウの木には宮浦宮の歴史が今も刻まれています。

樹齢は千年以上という説と600年程度という説があります。一方で、江戸時代後期の記録を見ると、宮浦宮の説明の中にイチョウの記述は特になく、絵にも描かれていません。樹齢については、いまだに多くの謎が残されています。

平成28年9月、台風により向かって左側のイチョウの木の枝が折れ、下にあった宮浦宮の社殿を破壊しました。現在、社殿は再建されていますが、枝が落ちただけで建物を破壊することから、いかに巨大な木であるかが分かります。イチョウは2本とも木の内部が空洞化しており、倒木防止や養生のため、平成28年度から3カ年で剪定作業を行い、樹高を低くしました。

かつての高さはありませんが、それでも巨大なイチョウの木です。今年も宮浦宮の境内を黄色く染め上げますので、神社の歴史を感じながら眺めてみてはいかがでしょうか。

（文責＝小水流）

台風被害以前のイチョウと宮浦宮

※1 馬を育てる野のこと。福山地域は馬の産地として有名だった。
※2 馬を追い込んで捕まえる行事のこと。良い馬を選ぶ意味と、軍事演習の意味があった。
※3 濃い青みを帯びた黒馬のこと。
※4 天皇の命令を伝える公文書を交付すること。
※5 神武天皇が九州から大和（現在の奈良県）に上り、日本を建国するまでの説話のこと。